

[報 告]

インテンシブ・イングリッシュ履修一年後における  
英検スコア変動に関する報告書

A Short Report on Changes in Students' *Eiken* Test Scores  
after One Year of Intensive English

ベゴール・ベッティーナ     サージェント・トレバー

BEGOLE Bettina, SARGENT Trevor

鳥取環境大学紀要

第9号・第10号合併号 2012. 3 抜刷

*Reprinted from*

BULLETIN OF TOTTORI UNIVERSITY OF ENVIRONMENTAL STUDIES

Volumes 9 & 10 Mar. 2012

〔報 告〕

## インテンシブ・イングリッシュ履修一年後における 英検スコア変動に関する報告書

### A Short Report on Changes in Students' *Eiken* Test Scores after One Year of Intensive English

ベゴール・ベッティーナ      サージェント・トレバー

BEGOLE Bettina, SARGENT Trevor

和文要旨：本報告書では、鳥取環境大学1年生の日本英語検定協会（STEP）英語能力判定テストBのスコアが、インテンシブ・イングリッシュを履修した1年間でどのように変動したかを調査する。データでは、2010年4月と2011年1月の両方のテストを受けた学生112人の平均スコアが21.6点上昇した。これは統計的に有意であり（ $p=0.00005$ ）、特にテストの読解セクションで大きく上昇した。平均スコアは、読解、文法、リスニングの全セクションで上昇したが、文章構成セクションでは下降した。著者は、テストスコアの調査から、インテンシブ・イングリッシュの科目が、このテストによって測定される学生の英語能力を向上させたと考える。

**Abstract** : In this report the authors examine the changes in Eiken Placement Test B test scores by first year students at Tottori University of Environmental Studies over the course of one year of Intensive English. The data show that of the 112 students who took both the April 2010 and January 2011 tests, the average score went up by 21.6 points. This was statistically significant ( $p = 0.00005$ ), and that the greatest gain was in the reading component of the test. Although the reading, grammar and listening sections all showed improved average scores, there was a decrease in the average scores in the sentence organization (syntax) section of the test. The authors believe from their examination of the test score data that the Intensive English program has improved students' English ability as measured by this test.

#### 1. はじめに

本報告では、鳥取環境大学1年生の英語能力判定テスト（日本英語検定協会）のスコアが、1年間でどれだけ上昇したかを調査する。調査の結果、2010年4月と2011年1月の両方のテストを受けた112人の学生の平均スコアは、21.6点上昇した。これは、統計的に有意である（ $p = 0.00005$ ）。本報告では、このスコアの上昇について考えられる理由を検討し、同テストを使用する付随的な意味について考察する。

#### 2. 背景

本学においてインテンシブ・イングリッシュを履修する学生は、4月当初のクラス分けテスト、翌年1月の学年末テストとして、1年に2回、英語能力判定テストBを受験する。これまで、学生のスコアの変化とその意味について詳細な調査が行われたことはない。本報告では、2010年度に鳥取環境大学に入学した学生の2回のスコアを比較する。

インテンシブ・イングリッシュの履修登録を提出した1年生149人のうち、2回目のテストを受けたのは112人であった。多くの学生が2回目のテストを受けないことは、例年、問題となっている。これは、多くの学生が2

年生で英語を履修する意図を持たず、2回目のテストが重要だと感じていないためである。本学にある4つの学科のうち、2年生でインテンシブ・イングリッシュを必修科目としているのは、情報システム学科のみである。他の2学科（環境マネジメント、環境政策経営）では外国語の選択必修科目、また最後の建築・環境デザイン学科では選択科目とされている。

本学に2010年に入学した学生149人のクラス分けテストの平均値は、680点満点のうち318点、中央値は309点であった。学生はこのスコアに基づいて6つのクラスに分けられ、インテンシブ・イングリッシュの3つの構成要素の学習を開始した。インテンシブ・イングリッシュという科目は1週間に3回行われ、実践英語Aではスピーキングとリスニング、実践英語Bでは読解と作文に重点を置き、アカデミック・イングリッシュでは主に日本語で基本文法の復習を行う。

まず実践英語Aでは、授業を主に英語で行い、自己表現に重点を置く。学生には、互いに英語で話し、英語で意見を発表することが求められる。講師とクラスメートの英語を聞くという点で、リスニングの練習が授業の重要な要素となる。各単元につき1回、CDを使用するリスニング演習もある。

次に、読解と作文に重点を置いた実践英語Bも英語で行われる。学生には、レベルに応じた英語の本を毎週30分以上、訳すのではなく読むこと（多読）が求められる。各学期の最初の7週間は、すべての学生が確実に行うよう、この読書を授業中に行う。学生には、サブボーカーゼーション（頭の中で音読する）なしで読む、単語ではなく短いフレーズや理解に必要な最小レベルに着目するなど、読み方に関する指導も行う。読解の目標、およびテストの望ましい波及効果は、1分間に約150語以上の速度で英語を読めるよう学生を訓練することである。この技能は、実用的であるだけでなく、読解セクションの問題を解く上で毎分約200語の読解速度が想定されているTOEICなどのテストにも有効である。

アカデミック・イングリッシュの授業は、インテンシブ・イングリッシュの3番目の構成要素として、1週間に1回行われる。この授業は主に日本語で行われ、学生は中学校と高校で学習した文法の復習を行う。指導の主な方法は日本語でパラグラフごとの要約で、逐語レベルの発音、発音記号の用法も扱う。シラバスでは「毎回文法の小テストを行い、文法力、構文理解力を強化し、さらに諸問題について自分の考えを英語で論理的に書く力を養う」と定義している（鳥取環境大学シラバス2010）。

本報告では、インテンシブ・イングリッシュを履修し、

2回のテストを受けた112人の学生のスコアの変化に注目して考察を行う。

### 3. 入学時テストと学年末テスト

使用したテストは、日本英語検定協会（STEP）英語能力判定テストBである。このテストBは、日本英語検定協会の資料によれば、英検（実用英語技能検定）2級～3級レベルの学生を対象としている。スコアの範囲は0～680点で、テストは所要時間35分の筆記50題と、所要時間25分のリスニング30題で構成される。テストの内容は、以下の表1のとおりである。

表1 英語能力判定テストBの内容

形式		問題数	
筆記	語彙・熟語・文法	30題	
	文章構成	5題	
	読解	会話文の文空所補充	5題
		長文の内容一致選択	10題
リスニング	会話の内容一致選択	15題	
	文の内容一致選択	15題	
合計問題数		80題	

日本英語検定協会のウェブサイトおよびテストに関する資料には、以下のように説明されている。

「(英検で)蓄積した受験者能力データに基づき、英検で相当する級（一次試験のみ）を表示します。取得したスコアがどの程度のレベルか把握する目安となります。」  
 「テストA・B・C・Dで出題する全ての問題には難易度分析データがついており、同じ尺度上で等化処理がなされています。したがって、どのレベルのテストを受けても、スコアは同じ能力を表します。例えば、テストBのスコアが400の受験者と、テストCのスコアが400の受験者は同じ能力を有しているといえます」(ibid, 2011)。

同協会のテストの信頼性に関する具体的なデータ（信頼性係数）は公表されていない。ETS (Educational Testing Service) が実施する別の語学力テスト、Test of English as a Foreign Language (TOEFL) は、TOEFL iBT (Internet-based Test) の信頼性係数を0.95と発表している (ETS, 2005)。類似の別のテスト、TOEIC (Test of English for International Communication) に関する公開データは、信頼性係数を0.96 (ETS, 2010) としている。このようなデータなしでテストの信頼性や有効性

を判断することは難しい。著者は、英検についても将来的に提供されることを望む。

#### 4. 結果と考察

学生が2010年4月に本学に入学した時のスコアと、学年末の2011年1月のテストのスコアを比較するため、StatPlusを使用し、二群の平均値の差について両側検定(t検定)を実施した。

表2 2011年の学年末テストのスコア比較 (n = 112)

	2010年 入学時テスト	2011年 学年末テスト
平均値 (M)	331.1	352.7
標準偏差 (SD)	80.02	85.29
df	111	
T	4.22	
有意確率(両側) p	0.00005	

2010年4月のスコア (M=331.1, SD=80.02) と2011年1月のスコア (M=352.7, SD=85.29) の間には、有意差があり、 $t(111)=4.22$ ,  $p=0.00005$ となった(表2)。この結果は、2010年4月から2011年1月までの21.6点の平均値向上が、偶然ではなく、能力の純粋な向上によるものであることを示唆している。この向上について考える理由も極めて明らかである。すなわち、すべての学生が受講したインテンシブ・イングリッシュの授業における英語学習の直接的成果である。

上記の表2からわかるように、112人の学生の2010年4月の履修開始時の平均値は331.1点であった。言い換えれば、インテンシブ・イングリッシュを履修しようとする学生の半数以上が、日本英語検定協会の判定によれば、実用英語技能検定(英検)4級レベルまたはそれ以下であった。実用英語技能検定とは国内最大規模の英語検定試験である。「英検」という試験は、初級の5級から4級、3級、準2級、2級、準1級、そして1級まで7つの級に分かれている。3級を持っている人は「身近な英語を理解し、また使用することができる。」4級に合格できた人は「簡単な英語を理解することができ、またそれを使って表現することができる。」(ibid, 2011) 英検3級は文部科学省の中学校卒業程度とされる。

1年間、インテンシブ・イングリッシュを履修した後、平均値は352.7点に上昇した。すなわち学生の半数が、英検3級レベルのスコアに達した。

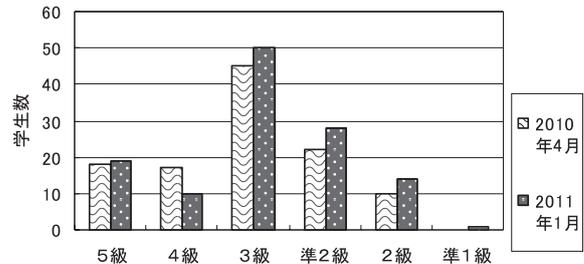
しかし、平均値がすべてではない。スコアのレベルに

注目すると、明らかに低い範囲から高い範囲に移行している。使用した英語能力判定テストBのスコアの範囲は0~680であり、問題は英検4級から準1級の範囲から選択されている。日本英語検定協会が提供する情報によれば、英語能力判定テストのスコアで0~250程度は、英検5級に相当する。250~280程度は、英検4級に相当する。280~370程度は英検3級、370~500程度は準2級に相当する。500~570程度は英検2級、それ以上は準1級に相当する。このデータは日本英語検定協会のウェブサイトに掲載されており、著作権のある資料だが、オンラインで閲覧が可能である

(<http://www.eiken.or.jp/placement/test/index.html>)。

この比較に基づけば、2010年4月の1回目と2011年1月の2回目の学生のテストスコアの変化は、下のグラフ(表3)のように示される。

表3 テストスコアの変化(履修前と履修後)(n=112)



グラフからわかるように、非常に低いレベルにある学生数はほとんど変わらないが、4級レベルの学生が減り、高いレベルに移行している。

この変化は、統計的に有意である。語彙・文法、文章構成、読解、そしてリスニングというテスト各セクションのスコアの変化を見ると、統計的に有意な変化が生じているのは、読解セクションのみである ( $p=0.01$ )。インテンシブ・イングリッシュの読解練習と訓練が、学生のテストスコアに有益な効果をもたらしたと考えられる。テストの他のセクションについては、語彙・文法セクションとリスニングセクションのスコアに確かな上昇がみられ、文章構成セクションのスコアはやや下降しているものの、いずれも統計的に有意な変化ではない。

英語能力判定テストの信頼性に関する日本英語検定協会の主張にいくらかの疑問はあるが、学生の全体的な英語能力は、インテンシブ・イングリッシュを履修した1年次において向上している。同協会は、「テストA・B・C・Dで出題する全ての問題には難易度分析データがついており、同じ尺度上で等化処理がなされています。したがって、どのレベルのテストを受けても、スコアは同じ能力を表します。例えば、テストBのスコアが400の

受験者と、テストCのスコアが400の受験者は同じ能力を有しているといえます」と述べているが、筆者は、スコア範囲の低い(0~570)テストCのほうが本学の学生集団に適していると考え。テストCの対象は準2級~4級のレベルである。テストBのスコア範囲は0~680で、2級~3級を対象としたレベルである。しかし、入学時テスト、学年末テストのいずれにおいても、受験した学生の最高スコアは531であり、テストBの上限スコアである680、あるいはテストCの上限スコアである570をはるかに下回っている。理論上は、学生のスコアはどちらのテストでも同じになるだろうが、680点満点中の331点(48%)と言われるよりは、570点満点中の331点(58%)と言われるほうが、励みになる可能性がある。もう1つの可能性は、TOEFL iBT(Internet-based Test)の利用である。このテストには、学生の能動的な英語力を測定する作文セクションが含まれる。

## 5. 結論

本学でインテンシブ・イングリッシュを履修する1年生が、2010年4月と2011年1月に同レベルの英語能力判定テストを受験した結果、平均して21.6点という有意の上昇が見られた。平均スコアは、文章構成を除くすべてのセクションで上昇したが、テストの4つのセクションのうち、読解のスコアのみに有意の上昇が見られ、読解

能力が総スコア向上の大部分に貢献したことを示唆している。著者は、インテンシブ・イングリッシュの科目によって、本テストで測定される学生の受動的な英語力(リスニングと読解)が向上したと考える。能動的な英語力を測定しない英語能力判定テストの結果から結論を導くことはできないが、この受動的な英語力の向上が、能動的な英語力(スピーキングと作文)にもプラスの影響を与えることを期待する。

## 参考文献

- (1) 鳥取環境大学シラバス、p. 57
- (2) ETS TOEIC Compendium (2010)  
<http://www.ets.org/Media/Research/pdf/TC-10-04.pdf>
- (3) ETS TOEFL Research: Reliability of TOEFL Internet-Based Test (2005)  
[http://www.hpc-uk.org/assets/documents/100011CBeducation\\_and\\_training\\_committee\\_20060613\\_enclosure12v.pdf](http://www.hpc-uk.org/assets/documents/100011CBeducation_and_training_committee_20060613_enclosure12v.pdf)
- (4) 財団法人日本英語検定協会
  - i . <http://www.eiken.or.jp/placement/index.html>
  - ii . <http://www.eiken.or.jp/about/index.html>
  - iii . <http://stepeiken.org/grades>

(受付日2011年5月26日 受理日2011年10月26日)